松之山の暮らし

過酷な気候風土の中で、暮らしの知恵と技能が歴史に裏打ちされてしっかり根を張っている。年を経るごとにこの地の奥深さを感じるの。自然と一体となった本物の暮らしがここにはある。こんな暮らしに巡り合えた私はなんて幸せ者なんでしょう。将来の子どもたちにもこの暮らしをなんとか継承してもらいたい。なんたって、「日本のふるさと」の暮らしなんだから。せっかくこの地に生まれ育ったんだから、都会では欲しくても手に入らないこの宝ともいうべき暮らしをしっかり身につけてほしい。

この家には「かまど」があるんだけど、前の住人だったおばあちゃんが、「煙で孫を育てたよ」って、よく言ってたって。そのかまどを使って薪でごはんを炊いてるんだけど、あんまりおいしいから電気釜はしまい込んじゃった。で、思ったの。世の中は電気釜や電気代に払うお金をせっせと稼いで、一味まずいごはんを食べてるんだと。ここでは野菜や米はほぼ自給。道具も作業小屋までも自分で作っちゃう。手間隙をきちんとかけて暮らしている。だから都会人も羨むグルメな食事、災害や危機でも生き残れる暮らしになっている。都会でお金を稼いでいる人たちは、お金で暮らしの一から十まで買うしかないのね。ここの暮らしには本当の豊かさがある、と日々感銘を受けているのよ。

エピソード

自宅の前に田んぼがあって、知人友人親戚みんなで米作りしているの。子どもも田んぼに飛び込んで、頭から足先までどろんこになって。あんまり喜んでるから、お風呂を用意して待ってたわよ。その親がえらいもんでさ、それをニコニコ見てたの。今の親って、危ないから、汚れるから、そんなことしちゃダメってよく言うでしょ。擦り傷や切り傷くらいさせてあげて下さいって思う。それでね、擦り傷ひとつくらいで薬ぬって絆創膏はらないで、舐めて唾をつけておけばいいじゃない。唾液って、一番すぐにできる消毒なのよ。子どもは野山で体を動かして遊ぶことが大好き。でも、汚すと親に怒られる。服のかぎ裂き、擦り傷ぐらいは覚悟してくださいね。野山を駆け回ったり、田畑を手伝って育った子は、まっすぐ育つし、伸びる時には伸びる力を蓄えてる。

プロフィール

名前　鶴田　豊子（つるた　とよこ）

1993年　キノコ狩りがきっかけで松之山に来て、「松之山中毒症」患者となる。
1998年　ついに松之山の借家に「お試し移住」。
1999年　当地の暮らしぶりと人間の良さに感動して、赤倉集落に定住。以降、自然の豊かさに驚き、自然観察指導員、ネイチャーゲーム、県ホタル保護指導員、山彦認定士の資格取得。松之山野鳥愛護会、松之山自然友の会、松之山薬草の会、松之山朗読教室の会員となる。
2003年　著書「暮らしてみたら魔法の里～越後松之山だより～」を出版。小学校の授業に呼ばれたり、著書のタイトルで地域のアチコチで講演。

得意な分野

エコエコ暮らし（エコロジー、エコノミー）、当地の暮らしを見つめ直すこと、専門分野は方言を素材にした言語地理学

支援内容

1. 森の散策（自然の楽しみ方、山彦遊びなど）
2. 無農薬田んぼの稲作
3. 松之山の自然と融合した暮らしの発見
4. 朗読

★山菜、薬草、キノコ、野鳥などは、観察学習中！

私のBEST5

暮らしの魅力

第①位

太郎の屋根に雪降り積む
移住後初めての冬。雪にすっぽり埋まった町に、和やかな落ち着きと温かさを感じた。

第②位

天然の芸術
ふと足元を見ると、見事な落葉の散乱。こうしたことが、私をこの地に惹きつける。

第③位

紅葉の散歩
山も伸ける、人も伸ける。

第④位

わが家の緑陰レストラン
田植え、稲刈り、キノコ狩り、山菜採り、日常のお茶、川風の香りと共に話が弾む。

第⑤位

わが伊端
火はごちそう。話も酒もどんどん進む。